

小倉百人一首

赏析

主 编：武 萌 李 晶

副主编：刘沙沙 张琼琼



秋の田の かりほの庵の
苦をあらみ わが衣手は
露にぬれつつ

荒野小草屋，戌田夜間宿。
冷秋悄悄至，衣袖披残露。



大连理工大学出版社



小倉百人一首



赏析

主 编：武 萌 李 晶
副主编：刘沙沙 张琼琼
编 委：（按姓氏笔画）

王伟军 史倩倩

孙玉林 刘沙沙

李 晶 杜武媛

张利军 张琼琼

张淑玲 赵克祎

武 萌 武 敏

董思嘉 廖 娟

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

小仓百人一首赏析/武萌,李晶主编. —大连:大连理工大学出版社,2009.6

ISBN 978-7-5611-4752-8

I. 小… II. ①武…②李… III. 和歌—文学欣赏—日本
IV. I313.072

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 094714 号

大连理工大学出版社出版

地址:大连市软件园路 80 号 邮政编码:116023

发行:0411-84708842 邮购:0411-84703636 传真:0411-84701466

E-mail: dulp@dulp.cn URL: <http://www.dulp.cn>

大连金华光彩色印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:140mm×203mm 印张:9.75 字数:243 千字

印数:1~3000

2009 年 6 月第 1 版

2009 年 6 月第 1 次印刷

责任编辑:宋锦绣 于 洋

责任校对:郑美玲

封面设计:张 虎

ISBN 978-7-5611-4752-8

定 价:22.00 元

前言

在全球化和互联网技术迅猛发展的大背景下,不同国家、地区、民族间的异文化交流达到了前所未有的规模和速度。伴随中日两国经济、社会、文化的不断往来,我国学习日语、研究日本的人数急剧增多。

但目前我国的日语教育普遍重语言、轻文化,重实用、轻传统。各个日语教育机构往往片面强调词汇、听解、发音、口语等基础训练,有意无意地忽略了文化的教育和熏陶。特别是大学和语言培训机构的日语教育,更是只注重语言本身,对日本文化的训导少之又少。结果导致学生只懂日语语言本身,缺乏对日本社会、文化的深层了解,知识面比较狭窄。

受中华几千年文化的影响,日本古代学者大多汉语功底深厚,在诗词方面的造诣非常高。要了解日本文化以及中日间悠久的历史文化交流史,对日本古诗词的涉猎不可或缺。在日本,从小学阶段就开始教授学生《论语》《唐诗三百首》等中国文化典籍,帮助学生了解中国历史文化知识。相比之下,我国日语教育本身起步比较晚(除少数地区外,基本是从大学开始),对日本文化方面的教育又相对偏少,因此,急需加强和补充这方面的教育。

我国的学校也开设了古文、诗词课程,普及面最广的非《唐

诗三百首》莫属。我们从小就通过学习、诵读《唐诗三百首》等古诗来了解中国古代社会和文化，而《小仓百人一首》则是日本人的“唐诗三百首”。《唐诗三百首》成书于1763年，由清代孙洙于53岁时编纂而成。《小仓百人一首》成书于公元1235年的镰仓时代，由作者藤原定家于74岁时编纂而成。《小仓百人一首》是作者从共计20余万首日本古和歌中精选出来的100个歌人的100首和歌，集日本古和歌之精华于一册，是了解日本古代社会、文化最好的教材和载体。

本书的汉语翻译部分参考了以下两位老前辈的专著。一本是日语翻译界老前辈檀可教授翻译的《日本古诗一百首》（外国文学出版社，1985），另一本是刘德润教授编纂的《小仓百人一首——日本古典和歌赏析》（外语教学与研究出版社，2007）。两位大家均有深厚的日中翻译功底，将日本和歌翻译成了中国古体律诗，古典韵味十足，诗情意境表达贴切，在此深表感谢。

本书主要由日文原文（标注假名）、现代日语读法、现代日语意思、试译、出处、作者简介、赏析、重要语法解析构成。其特色主要有以下几个方面：

一、将日文原文与汉语对照解释，加入了歌人的图像，避免读者阅读时的抽象感，让读者获得对《小仓百人一首》原汁原味的理解；

二、加入了大量日语古典语法解释，便于初学者对日语古典语法和原文的理解；

三、本书版式优雅，装帧精美，质量上乘，令人赏心悦目。

本书旨在通过以上的探索，为我国高校日语专业高年级学生、研究生、日本方面研究者、日语爱好者提供一本教材。

本书主编、副主编、编委中有很多人是我国日语教育界的专家，有着丰富的古典日语功底和多年的教学经验；来自我国外交、编译界的新秀，其扎实的翻译功底和对日本文化独特的视角也为本书增色不少。本书歌人的图像由现旅居日本多年的英国著名版画家Dave Bull花费整整10年之功完成，在此向他表示衷心的感谢和深深的感谢。出版之时，又深得大连理工大学出版社的鼎力相助，在此向他们（尤其是宋锦绣编辑）表示衷心的感谢。

由于水平有限，本书错误之处在所难免，恳请专家、学者及各位同仁不吝赐教，以便再版时能够及时更正，在此先表感谢。

《小仓百人一首赏析》编委会

目 录

- 1 秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ わが衣手は
露にぬれつつ（天智天皇） 1
- 2 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ
天の香具山（持统天皇） 4
- 3 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を
獨りかも寝む（柿本人麻呂） 7
- 4 田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に
雪は降りつつ（山部赤人） 10
- 5 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 聲きく時ぞ
秋は悲しき（猿丸大夫） 13
- 6 鵲の 渡せる橋に おく霜の 白きを見れば
夜ぞふけにける（大伴家持） 16
- 7 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に
出でし月かも（安部仲麻呂） 19
- 8 わが庵は 都のたつみ しかぞ住む 世をうち山と
人はいふなり（喜撰法師） 23

- 9 花の色は 移りにけりな いたづらに わが身世にふる
ながめせしまに（小野小町） 26
- 10 是れやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも
逢坂の関（蝉丸） 29
- 11 和田の原 八十島かけて こぎ出でぬと 人にはつげよ
あまの釣舟（参议篁） 32
- 12 天つ風 雲の通ひ路 吹きとぢよ をとめの姿
しばしとどめむ（僧正遍昭） 35
- 13 つくばねの 峰より落つる みなのか 恋ぞつもりて
淵となりぬる（阳成院） 38
- 14 みちのくの しのぶもちずり 誰ゆゑに 乱れそめにし
われならなくに（河原左大臣） 41
- 15 君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣手に
雪は降りつつ（光孝天皇） 44
- 16 立ちわかれ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば
今帰り来む（中纳言行平） 47
- 17 千早振る 神代もきかず 竜田川 から紅に
水くくるとは（在原业平朝臣） 50
- 18 住の江の 岸による波 よるさへや 夢の通ひ路
人めよくらむ（藤原敏行朝臣） 53
- 19 難波潟 短き葦の ふしの間も あはでこの世を
過ぐしてよとや（伊勢） 56

- 20 わびぬれば 今はたおなじ 難波なる みをつくしても
あはむとぞ思ふ（元良亲王） 58
- 21 今来むと いひしばかりに 長月の 有明の月を
待ちいでつるかな（素性法師） 60
- 22 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を
嵐といふらむ（文屋康秀） 63
- 23 月見れば 千々に物こそ 悲しけれ わが身一つの
秋にはあらねど（大江千里） 66
- 24 この度は めさも取あへず 手向山 紅葉のにしき
神のまにまに（菅家） 69
- 25 名にしおはば 逢坂山の さねかづら 人に知られで
くるよしもがな（三条右大臣） 72
- 26 小倉山 峰の紅葉葉 心あらば 今一度の
みゆきまたなむ（貞信公） 75
- 27 みかの原 わきて流るる いづみ川 いつみきとてか
恋しかるらむ（中納言兼輔） 78
- 28 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける 人目も草も
かれぬと思へば（源宗于朝臣） 81
- 29 心あてに をらばやをらむ 初霜の 置きまどはせる
白菊の花（凡河内躬恒） 84
- 30 有明の つれなく見えし 別れより 暁ばかり
うきものはなし（壬生忠岑） 87

- 31 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に
降れる白雪（坂上是則） 90
- 32 山川に 風のかけたる 柵は 流れもあへぬ
紅葉なりけり（春道列樹） 93
- 33 久方の 光のどけき 春の日に しづ心なく
花の散るらむ（紀友則） 96
- 34 誰をかも しる人にせむ 高砂の 松も昔の
友ならなくに（藤原兴风） 99
- 35 人はいさ 心もしらず ふるさとは 花ぞ昔の
香に匂ひける（紀贯之） 102
- 36 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに
月やどるらむ（清原深养父） 105
- 37 白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける（文屋朝康） 108
- 38 忘らるる 身をば思はず ちかひてし 人の命の
惜しくもあるかな（右近） 110
- 39 浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど あまりてなどか
人の恋しき（参议等） 113
- 40 忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は 物や思ふと
人の問ふまで（平兼盛） 116
- 41 恋すてふ わが名はまだき たちにけり 人知れずこそ
思ひそめしか（壬生忠见） 119

- 42 契りきな かたみに袖を しぼりつつ すゑの松山
波こさじとは（清原元輔） 122
- 43 あひみての 後の心に くらぶれば 昔は物を
思はざりけり（权中纳言敦忠） 125
- 44 あふことの 絶えてしなくは なかなかに 人をも身をも
恨みざらまし（中纳言朝忠） 128
- 45 あはれとも いふべき人は 思ほえて 身のいたづらに
なりぬべきかな（谦徳公） 131
- 46 由良のとを 渡る舟人 かちをたえ 行くへも知らぬ
恋の道かな（曾祢好忠） 134
- 47 八重葎 しげれる宿の さびしきに 人こそ見えね
秋は来にけり（惠庆法师）... 137
- 48 風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ ぐだけて物を
思ふころかな（源重之） 139
- 49 みかきもり 衛士のたく火の 夜はもえ 昼は消えつつ
物をこそ思へ（大中臣能宣朝臣） 141
- 50 君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと
思ひけるかな（藤原义孝） 143
- 51 かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしも知らじな
もゆる思ひを（藤原实方朝臣） 146
- 52 明けぬれば 暮るものとは しりながら 猶恨めしき
朝ぼらけかな（藤原道信朝臣） 149

- 53 嘆きつつ 獨りぬる夜の 明くる間は いかに久しき
ものとかは知る（右大将道綱母） 151
- 54 忘れじの 行く末までは かたければ 今日をかぎりの
命ともがな（儀同三司母） 154
- 55 滝の音は たえて久しく なりぬれど 名こそ流れて
なほ聞こえけれ（大納言公任） 157
- 56 あらざらむ この世の外の 思ひ出に 今ひとたびの
逢ふ事もがな（和泉式部） 160
- 57 巡りあひて 見しや夫とも わかぬまに 雲がくれにし
夜半の月かな（紫式部） 163
- 58 有馬山 ゐなの笹原 風吹けば いでそよ人を
忘れやはする（大貳三位） 166
- 59 やすらはで 寝なましものを 小夜ふけて かたぶくまでの
月を見しかな（赤染卫門） 169
- 60 大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず
天の橋立（小式部内侍） 172
- 61 いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に
にほひぬるかな（伊勢大輔） 175
- 62 夜をこめて 鳥の空音は はかるとも よに逢坂の
関はゆるさじ（清少納言） 178
- 63 今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで
言ふよしもがな（左京大夫道雅） 181

- 64 朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる
瀬々の網代木（权中纳言定赖） 184
- 65 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ（相模） 187
- 66 もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに
知る人もなし（前大僧正行尊） 190
- 67 春の夜の 夢ばかりなる 手枕に かひなく立たむ
名こそ惜しけれ（周防内侍） 193
- 68 心にも あらで浮世に ながらへば 恋しかるべき
夜半の月かな（三条院） 196
- 69 嵐吹く 三室の山の 紅葉葉は 竜田の川の
錦なりけり（能因法師） 199
- 70 淋しさに 宿を立ち出でて ながむれば いづこも同じ
秋の夕ぐれ（良暹法師） 202
- 71 夕されば 門田の稲葉 おとづれて 葦のまろやに
秋風ぞ吹く（大纳言经信） 204
- 72 音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや袖の
ぬれもこそすれ（祐子内亲王家纪伊） 207
- 73 高砂の をのへの桜 咲きにけり 外山の霞
立たずもあらなむ（前中纳言匡房） 210
- 74 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ はげしかれとは
祈らぬものを（源俊赖朝臣） 213

- 75 契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の
秋もいぬめり（藤原基俊）…………… 216
- 76 和田の原 こぎ出でて見れば 久方の 雲みにまがふ
沖つ白なみ（法性寺入道前关白太政大臣）…………… 219
- 77 瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に
あはむとぞ思ふ（崇徳院）…………… 222
- 78 淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に 幾夜ねざめぬ
須磨の関守（源兼昌）…………… 225
- 79 秋風に 棚引く雲の 絶え間より もれ出づる月の
影のさやけさ（左京大夫显辅）…………… 228
- 80 長からむ 心も知らず 黒髪 of 乱れて今朝は
物をこそ思へ（待贤门院堀河）…………… 231
- 81 ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の
月ぞ残れる（后徳大寺左大臣）…………… 234
- 82 思ひわび さても命は あるものを 憂きにたへぬは
涙なりけり（道因法師）…………… 237
- 83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも
鹿ぞ鳴くなる（皇太后宮大夫俊成）…………… 240
- 84 永らへば またこの頃や しのばれむ 憂しと見し世ぞ
今は恋しき（藤原清辅朝臣）…………… 243
- 85 夜もすがら 物思ふころは 明けやらで 闇の隙さへ
つれなかりけり（俊恵法師）…………… 246

- 86 嘆けとて 月やは物を 思はする かこち顔なる
わが涙かな（西行法師） 249
- 87 村雨の 露もまだひぬ まきの葉に 霧たちのぼる
秋の夕ぐれ（寂蓮法師） 252
- 88 難波江の 葦のかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや
恋わたるべき（皇嘉門院別当） 255
- 89 玉の緒よ 絶えなば絶えね 永らへば 忍ぶる事の
弱りもぞする（式子内亲王） 258
- 90 見せばやな 雄島のあまの 袖だにも 濡れにぞ濡れし
色はかはらず（殷富門院大輔） 261
- 91 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき
獨りかも寝む（后京极摄政前太政大臣） 264
- 92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね
かわくまもなし（二条院赞岐） 267
- 93 世の中は 常にもがもな 渚こぐ あまの小舟の
綱手かなしも（鎌仓右大臣） 270
- 94 み吉野の 山の秋風 小夜更けて ふるさと寒く
衣うつなり（参议雅经） 273
- 95 おほけなく 憂き世の民に おほふかな わが立つ袖に
墨染めの袖（前大僧正慈圆） 276
- 96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは
わが身なりけり（入道前太政大臣） 279

97	来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ（权中纳言定家）	282
98	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは みそぎぞ夏の しるしなりける（从二位家隆）	285
99	人もをし 人も恨めし あぢきなく 世を思ふゆゑに 物思ふ身は（后鸟羽院）	288
100	もしきや 古き軒端の しのぶにも なほあまりある 昔なりけり（顺德院）	291
参考书目		295

【1】

あき た かりほの 庵の 苦をあらみ
わが衣手は 露にぬれつつ

てん じてんのつ
(天智天皇)

现代日语读法

あきのたの かりおのいおの とまをあらみ
わがころもでは つゆにぬれつつ

现代日语意思

秋の実りの田の、粗末な仮の庵に私は泊まっ
ている。庵を葺いた苦が荒いので、私の袖は
露にぬれてしまった。



试译

荒野小草屋，戍田夜间宿。

冷秋悄悄至，衣袖披残露。

【出处】《後撰集・秋中》